

文字の空間的配置：手がかりを求めて

| | |
|-----|---|
| 著者 | 鹿島 英一 |
| 雑誌名 | 東北大学言語学論集 |
| 号 | 6 |
| ページ | 35-44 |
| 発行年 | 1997-03-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00129575 |

文字の空間的配置

——手がかりを求めて——

鹿島 英一

キーワード: 方塊文字, 空間的配置, 語間境界, 分ち書き, 基準線


1. 序論

映画の終わり際に流れゆく、川面の泡沫^{うたかた}の如き字幕の中に俳優や監督の名前を探してよく思うことがある。それは、洋画は邦画に比べて探し難いということである。多分、(分ち書き用の) 空白の間隔が不規則なせいであろう、語が瞬時に判別できないのである⁽¹⁾。無論、外国語であり、どう読んだらいいか分からないこともあって当然だが、(中国語での漢字音にあまり通じていなかった頃に) 曾て毎夜の如く通った中国の映画館では、そんな思いはしなかった。そうであってみれば、「文字の空間的な配置 (字形の並び)」は当該語文の本質に関係するのであって、決して文字転写 (transliteration) などでは代替できないもののように思われる。

さて、書面語、即ち文は文字や符号から成っている。そして、その配列順序は概ね (種々の) 左右横書きか、上から下への縦書きが基本となっている。勿論、文は対応する音声言語 (読み) と必ずしも順序が同じでないだけでなく、言葉 (音声言語) の一部を端折る自由も持ち合わせている⁽²⁾。だが、意味的な纏まりを持つ文字集団を単位として見れば、文は配列順序において幾許かの自由度を持つに過ぎないと言えよう⁽³⁾。

では、その文字集団の並び、即ち空間的配置はどうなっているのだろうか。無論、俄には分からない。それが正直なところである。或いは、「文字の字形構成は様々である。」と言うのがせいぜいである。本稿はこの現状を半歩進めようとしたものである。

2. 語間境界の諸相

我々の常識的なイメージでは、英文の様なラテン文字の文の語は横長の長方形である。だが、少しカメラのレンズをクローズアップすると、例えば [jump] という表記では左から右に ([u] や [m] の下端 (か上端) を通る見えない水平線を基準として、直交方向に) 凹凸の方形が続き、の外観を成しているのが見てとれる。また、例外的にはフランス文の [] (hiatus 記号) やベトナム文の [] など (アクセント符号) の様に上下 (縦) に並ぶものもある。

これに対し、方塊文字の代表とされる漢字は、例えば [糸] も [田] も正方形 (口) だと見做さ

れている。従って、この両者を横に並べた組合せ文字なら（幾何学の見地から）長方形となるはずである。しかし、現実の漢字[細]は相変わらず正方形のままである。従って、敢えて[糸田]と書けば、[いと・だ]か[た・いと]の如くに曲解される羽目に陥る可能性が高い。要は、全体の大きさから構成単位の大きさが決まってくるわけで、それが[飢]と[設]の[几]や[疑]と[短]の[矢]などに見られるような字形の大きさの違いを生むのである。

要するに、漢字を取り囲む見えない升目の外稜線(□)は、ラテン文字の諸語文などが採るスペース(横幅空白)の挿入に依る<分ち書き>効果にほぼ相当しているのである。無論、ハングルなども漢字と同様に外稜を成す線が上下・左右に対照なため、方塊文字と見做し得る。そして、それ故に(元来の縦書きだけでなく)横書きにも基本的に対応できているのである。尚、(具体例はこの原稿中に沢山あるので省略するが)漢字と平仮名の混淆文である現行の日本文の文節頭に来る漢字は、大抵の場合、「文節」(と通称されるアクセントの実態単位)の始点を示すという特別な機能を持っているように見えるが⁽⁴⁾、これは今触れた漢字の外稜線の機能とは違うものである。それは、文節始めの文字が特に担う機能という意味で、ラテン文字欧文の分ち書き用スペースやドイツ文の名詞語頭の大文字化因子に一脈通ずるものと言える。

では、文字集団をその前後の集団と視覚的空間的に区切る技術には、他にどんなものがあるのだろうか。例えば、インド大陸の北方に主として分布するナーガリー文字には目に見える水平の基準線(例: पुस्तक / लेकिन)があつて⁽⁵⁾、その上下にいろんな字形がぶら下ったり乗ったりしているが、外観自体は(下に重心の架かった点を除けば)ラテン文字語文と似ている。

ところで、文字集団の塊を明示するこの横棒はサンスクリット文表記に見られる如く、元来は音変化(連声)を伴う(語より)長い単位を繋いでいることが多かったようだが、(欧文による刺激でか)現代語文に関する限り分ち書きの実態は基本的に欧文式である。従って、インド連邦の国語の地位を占めるヒンディー文などの様に、固有の方式と欧文式のほぼ同じ二つの機能を持つものも出ている。だが、文字技術論に基づく限り、この冗長性には重要な意味が無く、欧文式のみを残す(採る)という選択は現実的である。

そして、現在、我々はその例を、マラバールに連なる西海岸とその後背地を拠点とするグジャラーティー文に見る。実際、この草書体風の西部型のナーガリー系文字が(その活字体に当たるとような字形の)標準型のナーガリー文字に、何故に吸収されないのか筆者はまだよく理解できない⁽⁶⁾。

今度はチベット文の分音節符号を見よう。例えば、[ཨ་ཁ་ཨ་ཁ་ཨ་ཁ་]はこの符号で水平の基準線が所々で欠損している点を除けば、ナーガリー文字の例とほぼ同じ外観をしている。その際、文字集団の右上隅(後方⁽⁷⁾)に繰り返し規則的に付されてゆく[・]は単音節言語の音節境界を示しており、本質的に漢字の「見えない升目」と同じ機能を持っている。チベット語も漢語も元来が単音節言語であつてみれば、当然の話である。尤も、それだけの理由なら、現在の横書きハングル文に似せて横幅を揃え、正方形(□)か縦長の長方形(▢)を基本形として採用する道もあったはずである。だが、歴史的な現実はそうになっていない。多分、仏典の翻訳問題などが

絡んでいたものであろう、実際にはインド風の音節文字を(複数) 組合せて新たな音節字形を構成する方法が選ばれた。似た例は、その東方の雲南地方に分布するラテン文字版のナシ(納西)文の[']⁽⁸⁾にも見られるが、この場合は語内部であって、語間では欧文式の分ち書きを使う。

ところで、このチベット文の方式は現代日本文では⁽⁹⁾、[やま／山 に い／行った]の類に当たり、優れた表記法と言える⁽¹⁰⁾。私見では、曾てのギリシャ文字のアクセント符号やアラビア文の母音符号と同様、非母語者に有益である。多分、チベット仏教の僧侶を目指して入山する⁽¹¹⁾ラマ教圏各地の若年層にも、役に立ったことであろう。

続いて、アラビア系文字に見られる語中での位置に基づく字形の使い分け現象を見る。無論、曾て中央アジア方面で隆盛を誇った文字だけでなく、今でもユーラシア・ステップ周辺に広く分布する現象である。さて、アラビア文の場合、(入門書等の記述に従って) 独立、頭字、中字、尾字の4字形が各文字に独自に備わっていると見るのはあまり实际的ではない。それは(筆者の調査では) 頭字と別の1形を標準的に装備しており、押並べて2字形と出ている⁽¹²⁾。尤も、語間境界に焦点を絞る限りは(字形上の更に微細な区別を基準に据えることも可能であって、詳しい説明は省くが) 先に触れた日本文の音節頭の漢字程度の語間境界明示機能なら持っていると思ふことはできる。

以上で、どうやら主なものが一通り出揃ったので後は必要が生じた時に触れるに留め、次の話に移る。(尚、当該言語自体に通じていない者には、何らの境界明示標識も無く、ただ続いてゆくとしか見えない語文が現実存在していることは特に論を待たない。)

3. 文字と位置

ギリシャ文字において、幾何学的形状の異なる[σ]と[ς]は同一の名称で呼ばれ、文法書によれば同一文字の二種の字形であると説明される。一方、漢字には「異体字」と呼ばれる対が(決して量は多くないが) 広く分布している。例えば現代漢語文の[猫]と[貓]⁽¹³⁾がそうである。一体、両者は(伝統や習慣を別にすれば) どこが違うのだろうか。また、その違いは当該語文の文字集合の中にどう反映すべきなのだろうか。ここから暫らくはこのことについて考える。

まず、「シグマ」の方は語尾では[ς]だけ、他では[σ]が正しいとされているから、勝手に語の一部を対の相手と取り替えると意味を成さなくなる可能性が高い。少なくとも初心者が辞書で探すのに困ることは確かである。これに対し、漢字の場合は些か異なる。要は、正統か傍流の違いだけで、文字としての機能は全く同じだから、一方だけを覚えておけばいいようになっている⁽¹⁴⁾。辞書も一方から他方が探せるようになっている。ところが、実際にはこれがそう額面どおりにはいかず、何れの場合も複数の字形に通じていないとうまくないようである。そして、多くの現代語で(やや強引に) 法律などによって異体字の一つを正字としているわけは実はこの辺にある。

だが、結局の所、やはり[σ]と[ς]は(同一文字の字形的変種でなく) 別の文字、即ち文字集合

の互いに独立な要素として取り扱った方が適当であるというのが私見である⁽¹⁵⁾。理由は「語中の位置」である。無論、この場合には語末か否かというだけの大雑把なものだが、語末であるために分ち書き効果を持っているのである。類例には、アラビア文字の [ع] と [ج] の対やラテン文字ドイツ文の [B] と [ss] の対がある。これも、同一名称である上、語末形か否かで字形の外観が大きく異なるからである。ただ、(同一音を表す) ドイツ文の対では ([B] と違い) [ss] は文字単位が二つ分あるから、両者は明らかに別の文字である⁽¹⁶⁾。

無論、理由は他にもある。例えば、共に同一音を表すとされる、スペイン文の [g] と [gu] やイタリア文の [g] と [gh] の対を見てみよう。これらは、ドイツ文の例に似ている。注意を要するのは「位置の規定」が(語末か否かから)「後続の母音字の種類」へと幾らか変わることくらいである。だが、これらは(既に、名称自体も別だが)各当該語文では通常、同一(文字)とは見られていないのである。

ところで、この見方に沿えば、[s] や [B] などは語尾にだけ表れる文字となるが、このように語中での位置や前後の文字環境が限定されることは何ら特別なことではない。身近な所では、文節頭には来ない日本文の [ん] も一例である。従って、アラビア文字の例でもギリシャ文字の例でも対をなす二つの字形は同一文字の二変種ではなく、各々別の文字と見る方がいいように思う。

これに対し、日本文漢字 [沢] と [澤] やデーヴァ・ナーガリー文字の [अ] と [अ] は先の漢語漢字の例の様に機能的には全く同じであるから(相互に)異体字関係である。ただ、日本文の場合は新字体とか旧字体とか言われて用語に惑わされる傾向があるので、本稿では新字体とは現行の常用漢字の集合の要素を、旧字体はそれ以外の日本文の漢字を指すものとする。尚、簡体字は中国などで使用する現代漢語の漢字、繁体字は人民共和国外ないしその成立以前から使用している字体を、大まかに指すものとする。尚、異体字の数に関する特別な制限は基本的には無い。

では、規範彝文の注音字母表記 [xix] 中の [x] やハングル表記 [영] 中の [o] などの場合はどう扱ったらいいのだろうか。というのは、彝文の例では音節末の [x] がアクセントを示し、ハングルの例では(文の縦書き・横書きに関わらず)上段が無音字に対応するからである。要するに、同じ語内に位置によってこの様に語音とそれ以外の機能を持つものをどう扱えばいいのだろうか。無論、機能の違いを前面に出して、別の文字とする立場が全くあり得ないわけではない。だが、筆者の立場は異なる。二つの字形の大きさが極端に違うわけでもないから、それは(共に英語彙の) [knock] の二つの [k]⁽¹⁷⁾ や [stones] の二つの [s] と同じ仲間だと見做す⁽¹⁸⁾のである。その際、注音字母彝文の方はラテン文字だから「頭、中、尾」の別を意味する「語中の位置」で処理できるが、ハングルの方は縦書きなら垂直(横書きなら水平)の「基準線に対する位置」⁽¹⁹⁾といった何か別の概念が必要となる。だが、ハングルには [마] や [규] の様な書写方向に影響されない基準線を持つ文字もあるため、「字形空間での位置」ないし「字形の空間的配置」がいいように思われる。

4. 字形配置の諸相

単語や文節に相当する文字集団を表記する方法には様々あった。一つは東西欧州の語文の様に⁽²⁰⁾、種々の方形の文字を基準線に沿って基本的に横に並べる方式である。そして、この場合には文字集団の大きさは「記号列の長さ」を意味するが、これらの文字では歴史的な経緯から母音を独立の文字で表すため、(そうでないインド系の文字などに比べて)一語当たり長さが大きくなりがちである。短所であろう。無論、この方式にも長所がないわけではない。例えば、アラビア文字の語文に比べると同文字異義語に悩まされることが少ないこともその一つである。だが、例えば [straight] (英語彙) の様な常用語の記号列が8つもの要素から成っているという現実が決定的で、読む時に首や目の横の動きが大きくなって長時間の読書を苦しいものにしがちである。無論、これを解消するのに文字を小さくするという方法もあるが、現行のアラビア文字の印刷物の場合と同様、これは目に良くない。一般に、年齢の増加に伴って分解能が落ちることを考えればやはりいい手段とは言えない。

ここで今述べたことを整理すると次の様になる。即ち、各文字が原則的に一音しか表さないことはラテン文字 (の語文) は (1) 「一文字当たりの情報量が少ない」を、またそれを専ら横に並べることは基準線上の (2) 「一カ所当たりの情報量も少ない」を意味する。そして、この内、ここで問題としている「記号列の長さ」と関係があるのは厳密には (2) の方なのである。

今度は、チベット文字とアラビア文字を例に採って話を進めよう。文字単位の一つ分がどこまでか、必ずしも明瞭でない文字体系の例と解することもできよう。さて、これらはラテン文字より情報量が多い。要するに、横に短い。しかし、その見掛けはかなり違う。即ち、チベット文字では (音節母音が [a] 以外では) いろんな母音用の小符号を付けて音節文字を造るのに対し、アラビア文字では (その大半を占める子音文字に付随すべき) 母音符号や重子音符号を省略する方法で同じことを実現している⁽²¹⁾。そのため、複数音を表す文字がラテン文字などに比べて広汎かつ一般的に見られる。勿論、これらにも英語彙 [knight] の [k / g / h] の様な無音字が無いわけではないが、量的に多くなく、大勢に影響はない。

ところで、以上の話は情報量の多寡の判断基準を一文字としても一ヶ所としてもよい。だが、ギリシャ文字やアラビア文字の文には [α] や [فى] や [م] の様に複数の文字を縦に積んだものも見受けられるし、[ཀྲ] の様なチベット文字にも [ྒྱ] に符号の [ྔ] と [ྒ] を付けたものがある。従って、この種の文字では一カ所当りの情報量の方が適切であろう。そして、この「一ヶ所」に [jump] 中の [j] (狭い) と [m] (広い) の程度の横幅の柔軟性を容認すれば、例えば [को] と [के] と [क] を同じ基準で取り扱えるためナーガリー文字を始めとする諸文字にも有効となる。

続いて、ハングルや漢字などの方塊文字の話に移る。さて、正方形の輪郭を持った音節文字としてのハングルは一カ所当たり大抵二つから三つの音を表すので、ラテン文字より情報量が多いと見てよい。また、朝鮮文の漢字はこの方形と語の長さに影響せずに、音節ハングル

(方塊) 文字と置き替り得る。一方、漢語文の表記でも漢字はローマ字表記よりかなり短くなるから、情報量は朝鮮文の場合と似た状態にあらう。その際、アクセント表記も数に入れば更に一ヶ所当たりの情報量は増す。実際、何か或る書物の欧文原本と翻訳漢語本を見比べれば、その情報の圧縮具合はかなりなものであることが分かる。

無論、これは日本文にも言えることで、その物理的・肉体的な容易さからよく実感するところである。多分、この漢字仮名混淆文形式の文の物理的な短さということが、諸々の短所があるにも拘らず、現在も常用されている重要な理由の一つであるように思われる。また、汎用のワープロの形式が、欧文のラテン文字が半角を基本とするのに対し、漢字が全角を基本として、基準線方向に二倍の長さを占めていることの背景には(純技術的な理由以外に) 今述べたような事情もある程度関わっているという気が筆者にはする⁽²²⁾。いかがであろうか。

5. 諸文字の空間的配置の実相 —— 日中の新字体の例を中心に ——

現在、我々が東アジアと呼んでいる地域に広汎に普及・分布している文字は、呼称からも推察できる如く、世界帝国「漢」の時期のものを基本的には受け継いでいる。従って、(個々の文字や細部に幾らか問題があるのは当然だが) 象形、指事、形声、会意、仮借、転注、という分類自体は現行の日本や中国の新体字においてもやはり有効である。だが、『説文解字』におけるこの「六書」の内、形声や会意などと言った複合文字の構成法は、その構成要素(である単体字形)の機能面に基盤を置いており、空間的配置にはほとんど注意が払われていない。要するに、[明]の[日]や[月]は「意味面での範疇」を限定しているのか「読音」を示唆しているのかといったことに関心が集中しており、左右なのか上下なのかといった両要素の平面図形内での位置関係は重視されていない。

だが、時代を経て、字形も増せばそれは以前よりは重要に成らざるを得ない。そこで、始めに配置の違いによって別の文字(字形)となる例を挙げる。(尚、以下では、*印は現代漢語の簡体字形を示す。また、用語としては基本的に漢語では繁体字と簡体字、即ち(繁)と(簡)を用い、日本語では旧字体と新字体、即ち(旧)と(新)を用いるものとする。)

さて、[唯]は[口]と[隹]から成っているが、両者の位置を換えると[售]という文字ができる。また、[力][口][木]を適当に並べて替えていると[枷]や[枒]や[架]を得る。同様にして、[只]は[扌]や[叭]*に、[叽]*は[舌]に、[加]は[另]や[叻]に、[古]は[叶]に繋がっている。[杳]*と[杲]*も[日]と[木]という両要素の上下交替による対である。ただ、中には[瓶](新)と[甌](旧)の対や[鄰]と[隣]の対の様に別の文字とはならないものもある。前者は新字体と旧字体という関係であり、([米]と[舛]の関係を固定した)後者は共に[邻]*の繁体字⁽²³⁾である。では、[力]を三つ三角状に配し、それに[月]を組合せた[脇]と[脅]はどうなのだろうか。日本文や繁体字では意味が異なるから明らかに別の文字である。だが、両者の簡体字は共に[肋]であり、言わば合併状態にある⁽²⁴⁾。そして、[作]の様に逆に簡体字で([作]と[做]に)

分離するものも無論ある。

ところで、漢語の場合、簡体字は繁体字より概して「字形と位置」の繋がりが強化されている。例えば、繁体字の部首[金]は、簡体字では[鑿]や[鎰]などの[金]の部首と[鈎]や[鉄]などの[钅] (かねへん)⁽²⁵⁾に別れ、字形も異なっている。要するに、部首が分化しているのである。類例は[言]と[讠] (ごんべん), [糸]と[纟] (いとへん), [衣]と[衤] (ころもへん), [犬]と[犭] (けものへん)を始め少なくない。この理由は、簡体字が農民とその層が多分に重なる大衆に対する文盲退治を主目的の一環として創出されたことにある。従って、この観点に立つ限り、繁体字で複数の字形を持った部首が簡体字で、例えば[人]⁽²⁶⁾と[亻] (にんべん)へと分化するのは勿論のこと⁽²⁷⁾, [水]・[氷] (したみず)⁽²⁸⁾と[氵] (さんずい)に, [冫] (りっしんべん)・[凵] (したごごろ)と[心]に分化するのも当然と言える。ただ、(分離と違い)合併・混在に際しては、字形をあまり変えないという傾向も見られ、(したみず)の字形を[水]に統一するようなことはしていない。

また、字形と位置の関係強化策も過度に徹底されてはいない。例えば、(注27で触れた[虫]以外にも)(つき)と(にくづき)を合併した新たな部首[月/月]は字形と位置の関係が明瞭であるにも拘らず、[金]と(かねへん)の様な分離には至っていないし、([邑]を分離後の)(おおごと)と([阜]を分離後の)(こごとへん)も同一字形のままながら、未合併状態にあるからである。

これに対し、日本文では[犬]と[犭] (けものへん)の対を始めとして、複数の異なる字形が同じ部首に属することが広く見られる。だが、この種の(規範的な)分類は実用的な観点からは自明というには程遠く、例えば日本語ワープロ(JIS規格)用の辞書ではこの両者は漢語の簡体字と同様、別の部首扱いになっている。換言すれば、これは日本の新体字は現実的な工夫が足りないということであり、実用に際してはワープロ辞書の様な状態を通用させざるを得ないということを示している。そして、この辺りの事情は第3章で触れた、同じ名称下で複数の字形を持つ、ギリシャ文字やアラビア文字での例に一脈相通するものがあるように見える。

ところで、以上で見てきた漢字の部首絡みのものと似た機能を持つものが他にも認められる。例えば西夏文字はその典型的なわけだが、無論東アジア世界以外にも分布している。そして、直ぐに思い浮かぶのが古代エジプト文字や楔形文字の限定辞であろう。例えば、ラアと呼ばれる太陽(神)のヒエログリフでの表記は[𐀀]だが、最後尾にある[𐀁]がちょうど漢字の太陽に関する部首(意符)[日]に相当しているのである⁽²⁹⁾。ただ、これはヒエログリフ(や後述の楔形文字)の限定辞が漢字の様に、升目の外稜線(□)内にその一部分として納まってしまうことを必ずしも意味しないことは当然である。

では、楔形文字はどうだろうか。実は、(ヒエログリフの文と同様)これも表意文字と表音文字の混淆文である。要するに、その概要においてカタカナと漢字に依る日本文と大差無いのである。では、一体どうやって両者を区別したらいいのだろうか。無論、現代の我々の様に高頻度で文に接する上に、文自体が口語体であれば問題もあまりないだろう。だが、その両条件が満

たされていない場合にはことはかなり厄介である。

そこで、[…外仁加エイト只化比刈仏祝…] という日本文を例に推測してみよう。(文は古文で、読み手は古文の学習経験が殆ど無いとする⁽³⁰⁾。)だが、残念ながら筆者にはこの自作の例はとも解読できない。大抵は、[…外仁かるえいといぬ只化ひめり仏祝…] とか […たといに加工 仆い又只い比刈いむね兄…] というふうになり收拾がつかないからである。楔形文字の場合でも、これが表意文字の訓読までであるアッカド文であれば、この設定はそんなに極端ではないという気がする。何れにしても表意と表音の両種の文字を識別する漢字の意符に類する限定辞があると便利なことは確かで、その存在意義が理解できる。

6. おわりに

語間境界に始まって、文字認定と位置との関係や文字配置と情報量の関係まで長年の間気に掛かっていた事柄に、漢字の簡体字を調べていて気付いた例を加えて書き連ねてみたのが本稿である。副題にも記したように全くの手探りであったが、何かしら手掛りらしきものに触れたような気がなくもない。折りあればいずれ続きを試みてみたい。

注

- (1) Hollywood 映画であれば、左端の字から目で追い掛け始め、空白にぶつかって(終わりと
なつて)初めて、意味が取れるというパターンを繰り返す。これは、ビルの屋上から眼下
に展開される交差点での自動車の列(全体)の発進する光景や世界各地の中華街の「舞
龍」(dragon dance)の動きに似ている。無論、これはやや特殊な例に属す。
- (2) 日本で長期間に亘って重要だった訓読式の漢文や中国雲南省の納西(ナシ)族の社会に
存するボン教風なトンパ經典文などを思い起こせば容易に得心がゆく。例えば、[レ]点
は読みの順序を逆転するし、助詞の一部は文面には記されない。尚、王(1996)には經典
のカラー刷りの例文や絵文字の語彙集が載っていて、試してみるには都合がよい。
- (3) 無論、具体的な方法の詳細は語文毎に違おう。だが、日本文で試すなら、今書いたこの本
文を、所謂「文節」を単位として、意味の通ずる範囲で並べ替えてみればよい。
- (4) 何故かこの機能については明言されることが少ないようだが、副詞に漢字を使用する
か否か(例: [ほとんど/殆ど])という問題の根っ子には、このことが係わっている。ま
た、常用語の名詞を[仮名+漢字](例: けい(脛)骨)([漢字+仮名]は別)で書くことに対
する心理的抵抗に端を発しているらしい現行の常用漢字の数の不足の問題や尊敬語
[御(ご)/お]の選定に関することこの問題と係わりがありそうである。
- (5) 例えば、この二つのヒンディー文語彙の表記において、実際にはこれが明示された基準
線なのか、主要字形の一部が偶偶繋がっただけなのかは外見から判定し難い。

- (6) 或いは、この連結棒を取り払うことによって、背後に何らかの未来の波が見えるというようなことがあるのかもしれない。というのも、西欧化の最先端を行く商都ボンベイとマハートマ・ガンディーを生んだその後背地を根城とする語文だからである。
- (7) 例えば、英文の場合<分ち書き>用のスペースは(正確には)「前置き」と見る方が適当であろう。というのは、(各段落末で見れば分かり易いが)文末符(period)の後方には空白は必要でないから、(次の)段落頭の空白部分は先頭の語の前に置かれていると判断できるからである。その際、文頭の1文字に付される大文字化因子は韓国文などには無いから文頭の位置情報の冗長性を増す役割を担っているわけである。
- (8) [cee'leeq] (鷹の一種) は和・姜(1985)に見える例である。
- (9) 膠着語という共通の性質に注目した場合の話である。外国人学習者に提示する初級の日本語を想定すれば現実味を帯び、実際分かりやすい。
- (10) 日本語でこの方式が採らない一つの理由は音声言語で重要な文節が分解される可能性があることで、[やま]と[に]がその例である。[山に]という漢字混じりで表記はこれを防ぐだけでなく、漢字の外稜(口)による分ち書き効果も期待できる。また、全文仮名書きでは(チベット文と違い)英文の様に横方向に長くなることも関係していよう。
- (11) 厳密に言えば、習得するのは仏典用の文語(古典語)だから(例えば、蒙古人でなくて)チベット系の者でも母語(口語)でない点では、基本的に大同小異かもしれない。
- (12) 私見の詳細は鹿島(1993)に譲るが、(独立字を外した)3形の関係は(1)3形別々、(2)3形同一、また2形同一では、(3)頭/中=尾、(4)頭=中/尾、(5)頭=尾/中、である。
- (13) 現行の中国ではこの字形は規則上は廃止されている。
- (14) この例の対なら当然、正字の[猫]であろう。漢字集合には[猫]だけを登録する。
- (15) 文字名称と実態の一致しない文字は他にもある。例えば、[w](double u/v)は1文字であって、[cc...]の様に同じ文字[u/v...]の二つからなっているとは見られていない。
- (16) 当然、ドイツ文の単体文字の集合に登録されるのは[B]だけであり、それは英文の26字中に[θ]音用の[th]が無いのと同じことである。
- (17) 先頭のは音と関係せず、最後のは音と関係している。
- (18) [s]音と[z]音を表記する両[s]の様に、チベット文[ṣṣ'] (ラサ方言)の二つの[ṣ]も音価が違う。
- (19) 無音の[○]は縦書きなら垂直の基準線上の左側、横書きなら水平線の上側となる。
- (20) キリール文字ロシア文などには音節文字的な要素も幾らか見られるから、ここでの話はラテン文字に的を絞った方が分かりやすいかもしれない。
- (21) チベット文字は音節文字、アラビア文字は単音文字とされているが、実態は必ずしもそうではない。
- (22) 平仮名が全角である理由は定かではないが、漢字の草書体との字形的な繋がりであることくらいしか思い当たらない。尚、言語構造の違いの影響や文字の大きさの選択の影響

などは、ここでは考察の対象から外している。

- (23) 社会科学院 (1983) の 717 頁参照。
- (24) 藤堂 (1981) による限り、この両文字は語源的に曾ては同じだったようである。
- (25) 部首の名称表記は便宜上、日本語名としておく。以下、同様。
- (26) 厳密には、[人／入] である。
- (27) 無論、依然 [蚊] 式 (左側) と [蚤] 式 (下側) と [融] 式 (右側) が混在している [虫] の様な部首もある。尚、部首や異体字に関するこの辺りの事情については、鹿島 (1994) に記載がある。
- (28) [・] 符号は [水] と (したみず) が同じ部首になっていることを示す。
- (29) この文字の体系は些か現行の日本文に似ている。即ち、表音と表意の両文字があり、その各字数も或る程度似ている。ただ、表音文字は母音を表さない子音文字であり、この例の表記は [ᵀ 日] といったところである。尚、縦横両書き対応のようである。
- (30) 幾分、極端な設定という感じもあるが、それを測る術もない。

参考文献

- 王超鷹 (1996) 『トンパ文字 —— 生きているもう 1 つの象形文字 ——』 マール社、東京。
- 笈川博一 (1993) 『古代エジプト —— 失われた世界の解読 ——』 中央公論社、東京。
- 杉 勇 (1981) 『楔形文字入門』 中央公論社、東京。
- 藤堂明保 (1981) 『漢字語源辞典』 学燈社、東京。
- 鹿島英一 (1993) 「諸文字の幾何学的特徴」『東北大学言語学論集』 2, 117–131.
- 鹿島英一 (1994) 「漢字圏の文字の構造」『東北大学言語学論集』 3, 49–64.
- 和即仁・姜竹儀編著 (1985) 『納西語簡誌』 新華書店、北京。
- 中国社会科学院語言研究所編 (1983) 『現代漢語詞典』 第 2 版、新華書店、北京。
- McGregor, R. S. (1977) *Outline of Hindi Grammar*. 2nd ed. Delhi: Oxford Univ. Press.
- Abboud, P. F. & E. N. McCarus (1968) *Introduction to Modern Standard Arabic Pronunciation and Writing*. Ann Arbor: Univ. of Michigan.

(長崎大学留学生センター 教授)

kashima@net.nagasaki-u.ac.jp